

青赤、夢覚まし

私はひどく怒っている。

何に対して怒っているかって？

それは目の前で先輩先輩と連呼しては引きずられていく愚かな男子、そしてその先輩という人物が原因だ。

その男子は当事者である私でさえも容易く看破できるほどの恋愛下手で、私の事を好いていた。私は何気なく彼と会話し、発展も無くまた一日を終え、そしてまた新たな日で同じ事をする。

変わらぬ日常。されど私の思いはほんの少し、ほんのちょっとであるが彼に対して何か特別な感情が重なっていったのだ。

しかしそんな彼は先輩という麗しき悪女の手下に成り下がってしまった。だからひどく怒ってしまっている。

飼いならしている最中の犬が別の誰かに懐いてしまっているかのような——いいや、こんな単純な例じゃ私の怒り、そして寂しさは伝わらない。

正直に言おう、私は彼の事が好きだったのだ。恋愛下手ながらも私に好いてもらおうと色々努力する彼が、恥ずかしがりながらも好意を向けてくれる彼の事が好きだったのだ。

そんな彼は最近、私に対して何故かよそよそしい態度を取っている。理由はよくわからないが、多分あの先輩が原因だろう。先週の月曜日からしょっちゅう先輩に引きずられては、困ったように、それでいてちょっと楽しんでいる表情を浮かべるのだ。マゾなんじゃないかっていう彼の性癖はここでは関係ない……と願いたい。

そもそも私以外にその新鮮で生き活きとした顔を向けているのが腹立たしい。死んで詫びろと、今なら言えそうな怒りを感じている。その怒りが抑えきれなくなって、私は例の計画を決行した。……そんな大層な計画ではないけれど。



「それであの先輩とはどういう関係で、何で私に対して引け目を感じた態度を取る訳？」

つまるところ正面突破だ。

学校という社会生活で無人が確保されている所なんてそうそうない。現に体育館裏なんてたまに人が来るし、屋上なんてベタな所には勿論鍵がかかっている。合鍵なんて一学生が持っている訳ない。

因って尋問場所はカラオケボックス。

——ちょっと来てもらえるかな？ 普段お淑やかな私と今のこのギャップで思考停止した彼を密室に連れ込む事に成功した。本当はお淑やかなのに、ここまでさせた彼が悪い。カラオケ代も彼に払わせよう、そうしよう。

「い、いやあの先輩とはそんな特別な仲じゃないよ。強引に連れ回されているだけで、僕は……うん？ ならこの状況も先輩と同じなんじゃないか？」

「同じって何よ！ 私の事を、密室に連れ込むのに一步遅れた強引女だって言うの！？」

全くなんと酷い男だろうか。こんな彼の事を私は気にしていたというのか。過去の私、考え直すべきだ。

「あ、いや……ね？ まずは落ち着こう。ドリンクどうかな？」

彼が立ちあがろうとする。私は彼の両肩を押し、

「すみません、水貰えますか？」

店の電話一本で穩便に済ませる。

「……やはり同一人物だ。さっきの彼女はいつものだった。ではさっきまでの般若は何だったのか」

ぶつぶつと思考をしては口漏らしている彼を見て腹立たしさを感じるが、確かにさっきは焦り過ぎていたのかもしれない。ここは落ち着こう。ひっ、ひっ、ふー。

「ラマーズ呼吸法は今関係ないんじゃない……ご、ごめんなさい」

野暮なツッコミも黙殺した。店員が水を持ってきた後も黙って水を飲むだけ。二人の間に会話はない。大御所アイドルグループの曲が店内に流れており、カラオケ機器からもやけに元気な声が聴こえてくる。

——どのくらい時間が経ったのだろう。ついさっきまで流れていたアイドル達の曲がいつの間にかラブソングに変わっていた。このままでは答えてもらうどころか、変なムードになりかねない。

「……それで、さっきの答えは？ 何言っても貴方の事なら信じるからさ」

やはりここは私が切りこむべきだろうと思い、元気よく話しかけたつもりだったが、思惑とは裏腹になんだか不安げな声を出してしまった。しかし彼は照れ臭そうに笑った。

「信じてくれるのは素直に嬉しいかな、なんて。——正直に話すよ。今の君が素直で純粋な本当の君だと思うし……驚いたけど気を悪くするどころか、なんか新鮮な気持ちになっているしさ。だったらここで僕も誠意を見せないと男が廃るってね」

もう既に彼はある程度整理ができていたのだろう、淀みなく不思議な体験談を語りだした。

彼曰く。お前の好きな人に恋心ばらしちゃうぞー。やめて。じゃあ日曜日に集合ね。音楽準備室後片付け。紫の布で被されたオカルトな鏡引っ張り出す。暗室一人でいると緑色に鏡が輝く。未来が視える——私との未来は平凡過ぎてつまらないもので、先輩という時はスリリングで人生充実ですよ、お兄さん。先輩の方が良さそうだなー。先輩の膝枕わっしょいわっしょい！

「……以上です」

「……」

「信じられないとは思うけど、こんな事があって——」

「一発殴ってもいいかな？」

「ひい！ ごめんなさい、膝枕気持ちよか……よくなかったです。はい！」

「男が既に廃っているようだけどその件についてじゃない。……膝枕の件は後で肅清を喰らわすとして」

本来なら正直に話してもらった分、心がある程度すっきりする筈なのだ。しかし私の腹立たしきは別のベクトルで膨らんでいた。

「どうしてそんな夢なんか信じるのかって事。夢占い結果で今後の人生変えてみますって言っているのは正直馬鹿らしいと思うわ。これから言う事を良く聞いて」

冷え冷えとした私の声に、彼は震えながら頷く。……そんなに怖い形相したかな。

「夢というのは自分で決めるからこそ、やりがいがあるのよ。いきなり目の前にこの夢を追ってくださいと一方的に視せられても、はいそうですかって追える？ 私は絶対無理。良く分からない物に勝手に予想される未来なんて楽しめる訳ないじゃない。そんなんで気後れしたら毎朝の占いできやあきやあ言っている女子と変わらないわよ。……せめて、私と付き合ってから考えてよね、もう」

「え、後半何言ったか聞こえなかった。店内でかかっている曲が丁度サビだったから……あべし！」

勇気出して言ったのに聞いてなかったのも、約束通り一発殴った。

「でも、正直そんなあっさりと信じてもらうとは思わなかったよ」

赤く腫れた鼻をさすりながら彼は笑った。男としては物凄く恰好悪いのに、何故こんなにまで彼はこの表情が似合うのか。

「まあ、私にもそれくらいの心得があるからね」

「……え？」

「勿論冗談よ。怪しげな話に少し興味を持っただけ。じゃあこの支払いよろしくね。ばいばい」

呆然とする彼をその場に残し、私はカラオケボックスを後にした。そして携帯電話を取りだす。コール音を流す間もなく相手は電話に出た。

「依頼を受けた。今夜、学校に行く。私一人で解決する。これから言うものを用意してきなさい。——」

『……承りました、お嬢』

その電話の相手は落ち着いた女性の声。相手の了承を確認して即座に電話を切る。

「さてさて、復讐しに行こうじゃないの。愚かな鏡さん♪」

暗い笑いを浮かべる私に対して道行く人は異常者を見る目つきをぶつけてきたが、悲しい事に否定はできない。——これから始める事は、それこそ異常な事なのだから。



「この鏡はどうやら西洋かぶれね。まず未来を示す前に緑色——嫉妬の光とは、魂胆を隠しきれてないわ。その癖、紫色で落ち着くとかどこの紫ババアよ。色霊に縛られすぎ」

部活帰りの生徒の声も響く事の無い夜更け。月明かりだけが照らす音楽室に私は居た。音楽準備室にあった例の鏡を引っ張り出し、挑発を行っていた。

傍から見れば完全に不審者で不法侵入者のように見えるが、きちんと根回しは済んでいるのでこうして堂々と奇々怪々な事ができる。相手は鏡という無機物なので、何も言う事はできない——はずだった。

鏡は突然緑色に光り、気がつけば辺り一面私が泣いている映像で埋め尽くされていた。

殴られて泣く、無視されて泣く、奪われて泣く。どれも胸糞悪い泣き方のオンパレードな映像集だった。

私はそんな関係なしに、泣いている私の顔を踏みつけながら笑ってやった。

「そういう事しちゃうのね。私が貴方に害を及ぼす人間だと分かっている、こうやって對抗してくるとは何とも人間らしい鏡——いや、オカルトね。でも残念でした。私はその類には手慣れているのよ。色が弱点の鏡にはこの赤と青の札をプレゼントするわ」

スカートのポケットから二枚の札を取り出す。白い紙に鮮やかな赤で漢字を崩して描かれた札。同じく白い紙に透き通った青で幾何学模様が描かれた札。

その二枚の札を目の前に掲げると、映像世界が波打つように歪み始めた。

「貴方の視せる未来——いいえ、夢というべきね。こんなつまらない未来を視せる為に、こちらの服装をそっくりそのまま移動する必要はなかったの。だからこうして対策される。……対策されるオカルトなんて、科学と変わらないわ。恥を知らなさい、半端な和洋折衷科学！」

バツの形でお札を貼ると、みるみるうちに辺りの映像が変わっていく。それはどれも私が幸せそうな映像だった。隣には彼と、そして何故か憎き先輩が居た。私と先輩が争って、彼が間を取り持とうとして私達に睨まれる。これからの日常らしい夢が大きく映し出されていた。

「危なくなったらおべっかとは、本当に人間らしい。……安心なさい、貴方を破壊するつもりはない。私の家の蔵で眠ってもらうだけよ。学校側の了解は得てあるしね。——夢を視せるのも疲れたでしょう、日本の緑に戻って眠りなさい。良き夢寐を」

映像が途切れ、緑の光が赤と青の色を取り込む。一面は真っ白に埋め尽くされ、そして現実の黒の世界に戻った。

白い月明かりを反射する鏡には赤と青の札が貼られていた。念の為、ポケットの中を漁ってみるが、予備の札だけしかなかった。つまり夢だと思っていた世界が現実であった。

「胡蝶之夢みたいな感じだったかしら……いいえ、ちょっと違うわね」

胡蝶之夢——夢と現の区別ができない状態、若しくは儚い人生のたとえ。

私はこの夢を儚いものだとは感じていない。だからこのたとえは間違っているのだ。現実はこのなにも不思議で、未来は不可視。不思議がこの世に溢れるからこそ夢を描き、そして運と努力で勝ちとる事ができる。人生は儚いものではなく、満ち溢れているものだ。

「先輩という私にとっての敵が現れたからこそ彼に執着し、この気持ちを抱く事ができた。その点、運はあるようね。残りは努力。故に考察する」

私は思考を整理する際に、複雑になりすぎないように口に出す事になっている。

「この鏡は先輩への好感度を上げる未来を彼に視せていた。先輩に何かしらの力——低級オカルトを従わせる程の力があるという事なのか。それに未来鏡なんて噂話を聞いた事が

ない。少なくともこの私には必ず耳に入ってくるはず。……成程、恋愛面もオカルト面もあの先輩がボス。——面白いじゃない、買ってあげる。売られた喧嘩を無視できる程私はできた女じゃないわ！」

校舎に響き渡る笑い声。誰もいないのだからこうやって笑っても問題はないはずだ。カラオケボックスのような密閉空間で笑うよりも、夜の学校という学生にとっては背徳的で解放感のある空間で笑った方が絶対に気持ちいいだろう。

「心外だな。私が君に対して喧嘩を売っていると思われていた事と、随分と悪女っぽい笑い方であるという二つの意味でね」

鏡を愛おしそうに撫でる女性——先輩は突如私の前に現れた。いつの間にいたのだろうか。月に向かって笑っていたので、教室の入り口と音楽準備室の扉は見えていなかった。

「何となく夜の学校に忍び込んでみたら、後輩の恋慕を一瞬で冷ましそうな笑い声を響かせる怪しげな女生徒がいるじゃないか」

「あら、怪しさなら突如現れた貴方も引けを取らないわよ」

内心の驚きを悟られないように地の本性で応対してみたが、彼女の笑みを湛える表情はこちらの内心を見透かして愉快地に笑っているように思えてならない。

「うむ、あの笑いは面白かった。つい携帯端末で録画してしまった。面白いものを独占するのも何だろうから、最近可愛がっている後輩に観てもらおうかな」

「成程、そうやって彼を丸めこんだのね。でも生憎私には——」

「送信完了♪」

「殺してやらあ！」

怒号が校舎に響く。彼女は何故かストライド走法で逃げ出し、私が廊下に出た時には既に彼女の姿はなかった。

この夜を私は忘れないだろう——これから訪れる夢の戦いの為にも。